日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

無的実存
――マルコ伝第10章13～31節――

１９６５年２月７日
小池辰雄

全的な在り方　信受　いかに生くべきか　無即無限　十字架即聖霊　なんじなお一つを欠く
自我を棄てろ　神さまの御用　「針の穴」という門　神さまにおいてできる　無的実存　人生
の課題　永遠の生命体　一切を救い上げる

【マルコ10・13～31】

13イエスの触り給わんことを望みて、人々幼児らを連れ来りしに、弟子た
ち禁めたれば、14イエス之を見、いきどおりて言いたもう『幼児らの我に来
るを許せ、止むな、神の国は斯のごとき者の国なり。15誠に汝らに告ぐ、凡
そ幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、之に入ること能わず』16斯て幼
児を抱き、手をその上におきて祝し給えり。
17イエス途に出で給いしに、一人はしり来り跪ずきて問う『善き師よ、
永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを為すべきか』18イエス言い給う『なに
ゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。19誠命は汝が知るとこ
ろなり「殺す勿れ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽証を立つるなかれ」
欺き取るなかれ「汝の父と母とを敬え」』20彼いう『師よ、われ幼き時より皆
これを守れり』21イエス彼に目をとめ、愛しみて言い給う『なんじなお一つ
を欠く、往きて汝の有てる物を、ことごとく売りて、貧しき者に施せ、さら
ば財宝を天に得ん。且きたりて我に従え』22この言によりて、彼は憂を催し、
悲しみつつ去りぬ、大なる資産をもてる故なり。
23イエス見回して弟子たちに言いたもう『富ある者の神の国に入るは如何
に難いかな』24弟子たち此の御言に驚く。イエスまた答えて言い給う『子た
ちよ、神の国に入るは如何に難いかな、25富める者の神の国に入るよりは、
駱駝の針の孔を通るかた、反って易し』26弟子たち甚く驚きて互にいう『さ
らば誰か救わるる事を得ん』27イエス彼らに目を注めて言いたもう『人には
能わねど、神には然らず、夫れ神は凡ての事をなし得るなり』28ペテロ、イ
エスに対いて『我らは一切をすてて汝に従いたり』と言い出でたれば、29イ
エス言い給う、『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、或は家、或

は兄弟、あるいは姉妹、或は父、或は母、或は子、或は田畑をすつる者は、
30誰にても今、今の世の時に百倍を受けぬはなし。即ち、家・兄弟・姉妹・母・
子・田畑を迫害と共に受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。
31然れど多くの先なる者は後に、後なる者は先になるべし』

●全的な在り方

今日はマルコ伝の10章13節から31節です。私の伝道では、しばしばここは語ったところです。キリストの福音は今日の一箇所に全部こめられてあると言っても、決して過言でない大事なところです。福音書の中でも特に選び出したいところの一つです。自分の誕生の記念ということもおかしいですけれども、そんな気持で語らせていただきます。

『曠野の愛』誌33号に、

「無的実存」

と題して内村鑑三先生の三十周年記念に書いたのがありますが、あれも『曠野の愛』の大事なものの一つですけれども、それと同じ題をここに掲げました。どういうことになるかは知りませんが。

13イエスの触り給わんことを望みて、人々幼児らを連れ来りしに、弟子たち
禁めたれば、14イエス之を見、いきどおりて言いたもう『幼児らの我に来る
を許せ、止むな、神の国は斯のごとき者の国なり。15誠に汝らに告ぐ、凡そ
幼児の如くに神の国をうくる者ならずば、之に入ること能わず』16斯て幼児
を抱き、手をその上におきて祝し給えり。

断然たる言葉です。キリストは神の国のおとずれを、その実体をそこに投じ、人々をそこに入れようとして来られた。申し上げているとおり、決してお説教をしに来られたのではない。

幼児のことがよく出てまいります。

「幼子らを天使が護っている。その天使は神の御顔を見ているんだ」

と、マタイ伝の18章にもありますとおり。また、マルコ伝の9章のところにも、

「42また我を信ずる此の小さき者の一人を躓かする者は、むしろ大いなる碾臼
を頸に懸けられて、海に投げ入れられんかた勝れり。」（マルコ9・42）

とあります。ダンテも天国の一番高いところに、聖徒たちと同じところに幼児を置いております。特に、お母さん方はその感を深くなさると思いますが、誰がどの人の子供を見ても、子供というものは本当に、小学校に入らないような子供というものは、本当にあどけない単純な純真なものです。その全的な在り方、その純真さ。今日は「無的」と掲げましたが、この無的ということと「全的」ということは一つなんです。そういった全的な在り方が幼児の在り方です。私たちはとやかくといろんなことを思案し、考え、分析し、行き詰まっ

てしまうわけです。それを全的にとらえ、全的に体験し、全的に自分をそこに投ずる。福音は実にこの気合が受けとれてこないかぎり、何年たっても、福音の世界には入れない。

ところが、弟子たちは、弟子ともあろうものがみんな、これをよく分かっていないもので、それを戒めて、

「そんなことはするな」

と、こういうわけです。お母さんたちがイエスに、子供に手を触れて按手していただきたかったわけです。

「イエス之を見、いきどおりて言いたもう」

と、キリストは非常にその時に怒られたわけです。

「私のところに来たらせなさい。そんな制止してはいかん。神の国はかくのごとき者の国である」

と。「かくの如き者の国」というのは、

「幼児だけが居るようなところ」

という意味ではなくて、幼児と同質の魂の者の居るところ、幼児と同質の魂の者が入るところ。

「幼児のごとく」

というのは、幼児と同質的に、質を同じうしている。全的なことになれば、幼児と同質なんです。

●信受

即ち、

「幼児と同質にして、神の国を受ける者が入る」

という。このときには、「信ずる」とは特に仰らないで、「受ける」と書いてある。マルコ伝9章の37節のところにも、「受くる、受くる」と書いてある。

「37『**おおよそ我が名のために斯る幼児（おさなご）の一人を受くる者は、我を受くるなり。我を受くる者は、我を受くるにあらず、我を遣（つかわ）しし者を受くるなり**』」（マルコ9・37）

「受」ということ。信受（しんじゅ）するわけです。

福音書というものは、これは次元が違うんです。いくら研究したって、それでは出てこないんですよ。だから、書いてあるとおりを、その書いてある事柄を、その奥において中身をぐっとそのまま信じ込む。自分の理性も感情も知識も意志も、みなこれを乗り越えたところの世界ですから。その中に自分を投げ込む。これは素晴らしい次元、奇蹟的な次元ですから。

とにかく「奇蹟」とか何とか言いましても、奇蹟はただ奇蹟ではない。神さまの法則が、

生命がちゃんと働いている世界です。我々には奇蹟としか見えない世界、そういった現象が起きているところの根源の事態です。

そういう凄いものがキリストというひとなのだが、とにかく分からんから、それにもう全部投じていきましょうと。この角度で行ったならば、何かしらんけれども、自分に押し迫って、これがつかめてくる。つかまれてくる。そうすると、いろんなことが聞こえてくる。見えてくる。力が出てくる。という、こういう話です。

キリストが

「**幼児（おさなご）の如く**」

と仰っていらっしゃるのはそういう角度です。幼児なんていうものは、知恵も知識も何もありはしない。ただ母親に信頼している。全的に信頼している。だから、こちらも全的にキリストの中に投じてみれば、そこからいろんなものが展開してくる。分析して、それからそれを総合して分かるのではなくて、一如の世界に入ってみたら、限りなく展開していく。この角度ですからね。

●いかに生くべきか

17 **イエス途（みち）に出で給いしに、一人はしり来り跪（ひざま）ずきて問う**

これは南に向かっての途です。エルサレムへの途です。青年が、

『**善き師よ、永遠（とこしえ）の生命（いのち）を嗣（つ）ぐためには、我なにを為（な）すべきか**』

と。問は、そのものはよろしい。永遠の生命を問題にしている。ユダヤ人らしい問です。「宇宙とは何ぞや」という知識的な問ではなくて、

「**永遠の生命を嗣ぐためには**」

と。死んでも死なないような生命をいただくためには――「何を考えたら」ではない――

「**何を為すべきであるか**」

という実存の問題です。問題は、実存の問題と生命の問題とが結びつかれているので、非常に正しい角度にあります。

「いかに生くべきか」

の問題です。

尊敬して、「善き先生」と言ったところが、ちょっとこの「善き」がわるかった。

18 **イエス言い給う『なにゆえ我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし。**

と。今朝、テレビをちょっと見ていたら、吉田松陰の萩の松陰塾が映ってきた。あんな小さな家に偉大な魂が教育された。塾的な生活をしていたわけです。今は全くどうも、受験、受験の試験難で、幼稚園から大学に至るまで受験難ですから。もう血なまこになっている。日本という国は何という大きな精神的な損失をしているか。肉体的にも非常にマイナスになっている。これは何とかして早く、この学校制度というものは改革しなければならない。

また、教員たる者たちが――人間尊重というが、学校で特定の宗教を説くわけにはいかんでしょうけれども――教える人たちが高次な宗教を身に体していることは大いになすべきことである。そういうことを文部大臣が大胆に言うようにならなければ、日本の教育はダメです。そういうことを思うと、ああいう佐久間象山だとか吉田松陰という、明治の先覚の方々の在り方というものを学びなおす必要があるだろうと思う。

我々、幸いにしてこの福音に接している者が――「聖書研究会」ではダメだ――どこまでも我々の集会というものは、そういった意味において本当の人間の形成である。その人間形成の道において、キリストはその旅の途においてもそのことをはっきり、ここでこの一人の青年をつかまえて、本当の薫育（くんいく）、本当の教育は何かをここでも、ここでこそ本当に実演しておられるわけです。まず、「善き先生」と言ったら、この先生は、

「なぜ、私のことを善いと言うか。神さまの他に何ものも善きとしてはいかん」

と。この無、即ち申し上げているとおり、私心のない無です。「無私」です。私は何度、黒板に書いても、自分で常に新たにそこにもって行かれるわけです。私心があったら、力はこない。本当の霊の世界で、一番禁物なのはこの私心という「自我」というものです。

「自己」というものはありますよ。神さまは、全世界とも代えられないような生命体としての私たち一人びとりを与えてある。一人びとりが確固たる一個です。しかしながら、それが自我主張の我（が）であったら、それはダメです、そういう我（が）であったら。無我の、無私の我（われ）です。

「無我とは、無私とは何ぞや」

と言われたら、このキリストのこの言葉を身に体すればいい。

●無即無限

「何ぞ、我を善きと言うか。神の他に善きものなし」

と。もう全然、ごまかしのない世界です、キリストは。いわゆる

「私はダメでございます」

なんていう、そんな謙遜ではない。いわゆる人間的な単なる謙遜ではない。ダメも何もありはしない。他のものと比較して、こっちがどうのこうのと、そんなことではない。神の前にもう全く平伏しの、ぶっつぶされた我です。これはもう論理にならない。論理的な頭の人にはわからない。ぶっつぶされた我というものは我なき我という絶対矛盾です。「絶対矛盾の自己同一」という。その絶対矛盾即自己同一ということ。

「無即無限」

と申しあげている、この「即」の字。即の字を手放しで悟る世界もあります。けれども、この福音の世界は、この即の字は手放しではない。この即の字に即ち、十字架がちゃんと

入っている。無即無限というときの即には、十字架がちゃんと入っている。

「無＝無限ゼロ＝無限大」

と書く。この「＝」は十字架です。というのは、私たちにとっては無私なんて言ったって、この無は十字架でなければ来ない無なんだから。イエス・キリストは、これは手放しで神さまの中に本当に入った、ただひとつの例外者です。私たちには、それができない。できないから、この

「我は何ものにもあらず」

という自覚は十字架においていただくところの「何ものにもあらず」です。いくら力んで言ってみたって、それはダメです。

●十字架即聖霊

無教会で十字架ということは非常に言ってきた。私もさんざん学んできた。罪が十字架によって贖われるという。それは悪くはないですよ。けれども、無教会といいながら、十字架によって無的な、本当に無的という場を、そういった実質をどうして受けられないだろうか。それはこの「即無限大」の、こっち側の項が本当に来ないからです。本当に無の世界に入ると、ただちにこれ（無限大）なんです。それは絶対に、この無限大の方は聖霊の世界です。キリストの生命の世界。キリストと共に十字架されると――もうパウロのガラテヤ書2章20節は何回繰り返しても仕方がない――

「キリストと共に十字架されたり。もはや、我生くるにあらず。我生く、されど我にあらず。キリストわが中（うち）に在りて生くるなり」

と。

「キリストわが中に在りて」

というのは聖霊のキリスト、聖霊のことです。キリストは天界にいらっしゃる。万人に生きてくださるというのは、聖霊において生きてくださるんです。この

「ただ一人なるキリストが万人に生きる」

とは何であるか。思われているのではない。生きるんです。万人に生きるためには、これは聖霊として限りなく無限に臨みたもう。全的に無限に臨みたもう。だから、こちらの無限大は聖霊の事態でなければならない。十字架がそのようにして、即聖霊の事態に切り替わって、これは紙の表と裏のように――表があれば必ず裏がある。裏があれば必ず表がある――切っても切ることができない。そうでなければ紙にはならない。そういう世界です。

そういうことを本当に私たちは――神学的にただものを言っているのではない――私たちの体験として、もうそうでなければやり切れんです。やり切れないし、必ず行き詰まる。また、どんなことが起きましても、突破できるというのは、これ（無即無限の事態）ですから。

キリストがかく仰ってくださったこの言葉は無限に尊いのです。このキリストが、

「なぜ、私を善いと言うか。私は何も言えない。何もできない」

と仰っているとおりなんです。「何もできない」とキリストは言っている。それは、

「我（神）に在りて全てのことを為す」

という。何もできない者が、神にあっては一切ができる。もうはっきりしているんです、この福音の世界のその構造は、この生命構造は。

どうして、私がこんなに「無」と言ってわるいんでしょうかね。何か「虚無思想」と間違えたり、あるいは、

「何か東洋的な無と混同するといけないから」

と言って恐れてみたりね。何と今のキリスト教の福音なんていうものは情けないことを言っているか。皆さんは本当の確信をもってくださいよ。私はいつ仆れるか知らんから。

イエス・キリストの十字架によって、私はこの素晴らしい「無」をいただいてしまった。そうすると、それは「即無限」で、この

「全的ということがどういうことであるか」

がそこでつかまえられるわけです。ゲーテという人がこの「全的」という言葉が非常に好きだった。すべてを本当に一体としてつかまえる角度をもっていた。そこで、ドイツ人は非常に分析的なものだから、ゲーテに感嘆するわけだ。

●なんじなお一つを欠く

19誡命は汝が知るところなり「殺す勿れ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」「偽証を立つるなかれ」欺き取るなかれ「汝の父と母とを敬え」』

これは大体、人間関係のことだけを書いてありますが。十誡の始めの方は、

「汝、わが面の前に何ものをも神とすべからず。
何の偶像をも己のためにきざむべからず。
安息日を覚えてこれを聖くすべし。
わが名をみだりに呼ぶべからず。」

この四つでしょ。これは出エジプト記20章、申命記5章に書いてあります。そして、あそこに、

「我は焼きつくす火である。妬む神である。我は汝の神である。私はお前たちをエジプトから導き出したものである」

ということが一番先に書いてある。そして、この十誡が与えられる。モーセはこの十誡が与えられるときに、本当にシナイ山にこもって、四十日四十夜、神の前に祈った。そしたら、モーセはこの示しをいただいた。彼は山から下りてきたら、顔が、あの変貌のキリストのように、非常に輝いていたとあります。そういう聖なる律法です。

しかし、申しあげているとおり、

「勿(なか)れ、勿れ」
ではなかった。本当は、
「汝はわが顔の前に何をも神としない。……汝は殺人しない。汝は姦淫しない。汝は盗まない。」
という断定であった。「なかれ」という戒めはそれから派生はしてきても、本来は神さまが信愛して、これを断定して仰っている言葉である。それが律法の根本精神である。旧約聖書をもし訳すならば、あそこをまずそう訳してみたいと私は思うくらいです。ヘブライ語でも、「ロー」という字と、「アル」という字は違う。「ロー」というのは「なし」といって断定している。「アル」という字が「なかれ」という字なんです。ところが、あそこはみんな「ロー」が使ってある。
それで一応いわゆる律法として、この青年は守ってきて――
「律法の義については責むべきところなし」
とパウロが言ったけれども――パウロと同じように、この律法の義については責むべきところないような立派な青年で一応あったわけです。だから、キリストがいとおしんで、じっと彼を見られた。
「よく守ったきた。けれども、なお一つを欠くんだ」
と。
20彼いう『師よ、われ幼き時より皆これを守れり』21イエス彼に目をとめ、愛(いつく)しみて言い給う
と、非常にここのところは懇ろに書いてあります。
『なんじなお一つを欠く、
一つのことが欠けている。
往きて汝の有(も)てる物を、ことごとく売りて、貧しき者に施せ、さらば財宝(たから)を天に得ん。且(かつ)きたりて我に従え』
別なところには、
「十字架を負いて我に従え」
と書いてある。これはマルコ伝とマタイ伝とルカ伝に出ております。畳みかけて、キリストはこの難問をそこに発せられたわけです。富める青年ですので、
「さぁ、その富をみんな棄ててしまって、貧しい者にやって、私に従って来い」
と。

●自我を棄てろ

22この言によりて、彼は憂(うれい)を催し、悲しみつつ去りぬ、大なる資産をもてる故なり。

私も、もし富める青年だったら、この青年と同じようにすごすごと退陣したでしょう。

「では、私はそんなに金持ちではないから、このお話はいいや」

なんて思ったら、これも間違いです。この富める青年の非常に大事なものは富である。

「その大事なものを棄てろ」

と言う。キリストは、ただ「そこらに放っぽらかせ」と言うのではなくて、

「貧しい者にやれ」

と言う。棄て方があるわけです。貧しい者にやるということは、この場合の青年にとって、この富の一番よい使い方である。それをキリストは教えられた。

何でも私たちの持っているものは神さまのものです。神有（しんゆう）である。私有財産もみなこれ神有である。神の有（もの）です。芸術の才能のある人は、その大事にしている芸術の筆を棄てろという。お医者さんなら、何か大事な機械をすてろと。政治家なら、その政治的な手腕を棄てろ。学者なら、その知識を棄てろ。ランニングのチャンピオンなら、その足を棄てろ。女の方なら、いろいろな特色がおありでしょうが、その一番私の大事なものと思うものを棄てろと、こういう無理なことを仰るわけです。これは誰だって、ちょっと考えてしまうよね。それで、

「さぁ困ったな。それでは生活が成り立たないな」

というわけだ。けれども、キリストはその人の大事なものにおいて、あるいは、大事なその才能において、大事ないろいろなものにおいて、結局、

「自我を棄てろ」

ということです。それに囚われている自我を棄てろと。私たちが、人間が無になれない、本当の無私になれないということを、ここでまたキリストは具体的につかれたわけです。

●神さまの御用

どんなものもみな、これは神さまのものなんです。神さまから預かっているもの、神さまが下さっているもの、賜物（たまもの）です。皆さんの特色はみんな賜物です。

「これは自分でつくった」

なんてものは一つもありはしない。賜物なんですから、神さまの御用なんです、要するに。我々は御用的な存在なんです。御用的存在だから、御用にたつように使えば、それが神の栄光が現れるということです。

封建制度は悪いけれども、封建制度の時代には、そういった上（かみ）のものに対して、下（しも）が己を犠牲にするような角度の在り方があった。もちろん、人格がそれで踏みにじられたり、いろんな人間としての割り切れない面がたくさんあったから、それは悪いですけれども。相手が人間だからね。けれども、これは福音の世界では「神さまの御用」なんです。日本国民としては、天皇陛下の御用が今度は、神さまの御用になるわけです。

神さまの御用に使うためには、そのものにおいて自我を惜しんでいるこの自我がやはり否定されなくてはならない。これができないから、この青年と同じように私も落第です。それが及第するためには、絶対にこの十字架にこなければ、そこが突破できない。

神さまの御用に本当に私たちが――

「あれどもなきがごとく、なけれどもあるがごとし」

という世界にパウロがいましたが――有も無も、相対的な有も相対的な無も、本当の絶対的な無の世界にくると、絶対の有、無限という有の世界に入れる。とにかく、魂がそこに座をしめて、そこに腰をおろした魂にならなければ。人生はいろんなことがありますよ、いろんなことにぶつかります。あなた方もたくさんあるわけだ。運命や幸や不幸や。そうしたら、またこのマルコ伝10章にやって来るといいです。

●「針の穴」という門

23イエス見回して弟子たちに言いたもう『富ある者の神の国に入るは如何に難いかな』24弟子たち此の御言に驚く。イエスまた答えて言い給う『子たちよ、神の国に入るは如何に難いかな、25富める者の神の国に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた、反って易し』

という。要するに、心が富んでいる、心が驕っているということです。我々はこういった自我が棄てられないんだ。そうしたら、ダメだと。何も財産のことを言っているのではない。

それよりも、駱駝が針の穴を通る方がやさしいと。これはあまり針小棒大な形容なものだからちょっとおかしいと思うわけです。これはアラミ語では母音を変えると、

「大綱が針の穴を通る」

という言葉になる。ああそうだろうと私は思ったところが、イスラエルでエルサレムの古本屋で私は尋ねたんだね、古本屋のヘブライ人のおやじさんに。そうしたら、即座に答えた。

「『針の穴』という小さな、駱駝が通れないような門があった。その『針の穴』という固有名詞なんですよ」

「ああそうですか、それでよく分かりました」

と。キリストは何も無理なことは仰らない。それで、駱駝が通る方がまだやさしいと。ちょっとこれは駱駝が通れそうもないという狭い門があったんです。キリスト教の註解書にもそういうことが書いてないのだから、時々そういう盲点があるんですよ。

●神さまにおいてできる

とにかく、そういうようにできない。

26弟子たち甚く驚きて互にいう『さらば誰か救わるる事を得ん』27イエス彼らに目を注めて言いたもう『人には能わねど、神には然らず、夫れ神は凡ての

事をなし得るなり』

「神さまはできるけれども、それでは結局、誰にもできない」

と、論理ではそうなりますよ。キリストの答は答にならない。

「誰もできないが、神さまができる」

なら、誰もできないという結論になってしまう。キリストが仰っているのはそうではない。

「お前たちは、手放しでやろうとしたって、それはダメだ。神においてあれ。神さまはできるんだから、神さまによって。神さまの中に入ってごらん。そうしたら、できる。」

と。キリストは、

「私は、無善であり、無能であり、無教である。けれども、自分がこんなに何ものでもない者だからこそ、全的に神の中に自分を投じたらば、自分は即ち全的なものになった」

と。だから、「神さまはできる」とキリストが仰ったときには、

「私は神さまにおいてできる」

ということ。キリストは「神さまができる」と言うときにはもう、その神の中に入ってものを言っているから。

魂が、床の中におりましても、どういう状態にありましても――私も珍しくちょっと風邪気味になった。実際、身体が弱いときにはなかなか祈りがある意味において、きかないことがある。そういうときにはもう言葉はいらんです――ただキリストの懐の中に自分をグーッと瞑想して入れる。もう概念の世界ではない。そうして入ったら、本当にはらわたの底から、

「主さま！」

と呼んでごらん。忽然として力がくる。これはいろんなことにぶつかって、自分で体験しなくてはいかん。そして、風が吹いているから、普通なら外へ出ていくと悪い。よし、抵抗してやろうと。今度は魂の奥にキリストの霊的な力をいただいて、そして風に向かって歩いて行く。風邪はひかないです。ひいていても、今度は逆によくなる。というようなこともあるわけなんでありまして、どうか、皆さん、絶対に魂の世界で負けてはいかん。負けてはいかんということは、自分で力むことではない。全的にキリストの中に入れば、さきほどの詩篇46篇の

「苦しめる時のいと近き助けなり」

のように、いと近き助けである。

「静まりて我の神たることを知れ」

という。

「静まりて、神の中に自分を静めていろ――キリストの中に静めてみろ――我の神

たることが分かるぞ」

と。だから、

「それ神は凡ての事をなし得るなり」

と。神においてはすべてのことをなし得る。「神は」を

「神においては」

と、はっきりそう読んでいい。こだわらない。キリストは「神は」と仰っているが、このときは「神においては」ということだと、はっきり自分でそう読んでいけばいい。どうも、学問というやつはこだわって困るよね。パウロだってローマ書を書いて、

「もう一遍ローマ書を書いてごらん」

と言われたら、パウロはローマ書をもう一遍書けないです。一回限りでしょう。今度はまた別なものを書いてしまう。そういうもんです、真理というものは。

「こう書いたから、もうこれよりか他にもう表現がない」

なんて、冗談じゃない。限りないものです。ダイヤモンドが凄いのは、そのダイヤモンドの各面においてキラキラといろんな光を発する。しかし、ダイヤモンドそのものには変わりがない。その時その時、その角度その角度から、いろんな光を発しているのが、本当の真理の世界です。もう屈託のない、本当の、何というか、

「それでは、お前たちは聖書を主観的に見ているではないか」

なんて何を言っているか。主観とお思いになるなら、いくらでもお思いになってください。主観ではない、絶対自由の見かたができるんだ。

「聖霊のあるところに自由あり」

というのはそういうことです。何もこじつけではない。

●無的実存

そういうようにして、私たちが本当に十字架において、虚無でないところの無私的な無的となりますと、そこに今度は、本当のものが、実存というものがこの無的というところに、十字架において無的とされていると、聖霊におけるところの実存が出てくる。「無的実存」とは

「十字架と聖霊」

という言葉を含んでいますから、どうぞ間違わないように。この実存とは、聖霊における実存でありまして、自分たちの側の何か「実存」なんてことを言って、

「あの人は信仰的に立派である」

とか、そんなことを言っているのではない。

さっき、「キリストが来た」とか何とか、妙なお話があったけれども、本当の意味においては、キリストが来なくてはいけないわけだ。けれども、それはどんな人に向かっても決して、

「何ものでもない人」
でなくてはいかん。何かポーズがあってはダメですよ。すぐ私は二言目には、無教会の悪口を言って、いけませんけれども、無教会的ポーズというのがあるんだよ。私は無教会に育ってきたから分かっている。あれはいやなんだ。どうか、皆さんも、幕屋的なポーズなんてものはつくらないでいただきたい。何も幕屋なんてものはありはしない。何て言いますかね、私はもう、そういう何かこちら側の限定したものからみんなはずれてしまったんですよ。何と言われてもいい。もうただの、凡人（ただびと）、ただのひとです。
実朝（さねとも）の歌に、
「神といい仏というも人の世の人の心のうちにこそあれ」
とある。神と言い仏と言っても、それは人の世の人の心のうちにこそあれと。神さまも仏も本当は何かどこかに思いうかべているのではなくて、人の心のうちにこそ本当に住まうものが神であり仏である。この無的実存の世界に入ってくるというと、実朝のあの歌が私たちにとって本ものになってくるわけです。
ゲーテがあのグレートヘンとの宗教問答のところで、
「あなたはキリスト教を信ずるか。神さまを信ずるか」
と聞かれて、
「対象的に信ずるというようなことではない」
ということを、ゲーテはあそこで答えようとしているわけです。
「一切を担うもの、一切を包摂するもの、また、あなたをも私をもとらえているもの。そして、本当に自分がその中にあるならば、それを心と言おうが、神と言おうが、それはご勝手だ。情感（ゲフュール）がすべてである」
と。あの「ゲフュール」というのは、ただ感情のことではない。全的にそれを本当に受けとって感じているという――それがなければ、感ぜられないんだから――本当にそれが一切であるということです。ということは、
「本当にその中に生きるということが大事だ」
ということ。ゲーテはいわゆるクリスチャンではないけれども、実はキリストのこの角度に非常に近いものをもっている。彼の最期のエッカーマンとの対話でも、
「私はキリストの前には無条件に平伏す」
と彼は言っている。
そういうわけで、どんな世界の偉大な文豪であろうと、芸術家であろうと、哲学者であろうと、大英雄であろうと、ナザレのイエス・キリストの前にはみなどうにもならんです。ナポレオンも最後にセントヘレナで、
「ナザレのイエスには負けた」
と言った。どうしてですか。そのイエスというひとは、

「私は何でもない」

と言っている。この「私は何でもない」というところを、本当に私たちは限りなく深く受けとって、そして、

「主イエス・キリストの聖霊こそわが一切である」

というところに、私たちが質的に限りなく前進していくことが、我々のこの福音の証です。もう、すべてに対して本当に胸襟（きょうきん）を開いて、カトリックであろうと何であろうと、どこにでも出かけて行って、そいつを全部包摂してしまう。担い上げてしまうような、そういった存在はこの無的実存にこそある。何と言われようと、概念でなんか喧嘩する必要はない。

「何だか知らんけれども、あの人の中にはもの凄いものが動いている。もの凄い無の世界だな。宇宙的な何かが動いている」

というような方です、イエス・キリストというひとは。だから、広大なる福音なんです。

どうか、皆さん、そういうように、もう老いたるも若きも、男も女もありはしない。どうか、そういう質の魂になってください。私はそれだけを――

「ただ一つを欠く」

ではない――その唯だ一つを私は皆さんにお願いする。これだけが、私の皆さんに対する本当の悲願霊願です。そういう無的実存をもって、私たちはこの使徒的な福音の世界の、使徒たちも実は驚くようなキリスト者です。なれるんです。マルチン・ルターなんていうのはまだ、そこではまだるっこしい。まだパウロからズレがきている。

楽しいでしょ、そういう世界に私たちはのしかかってきたわけです。そうしたらもう、皆さん、皆さんの中にそういうものがふつふつとして湧いてごらん。コイノニアなんて言わなくたって、お互いに楽しくてうれしくて、本当の魂の握手をして進んで行けますよ。それぞれのグループもみんなそういう気持でもって、お互いに本当に行けますよ。

●人生の課題

28ペテロ、イエスに対（むか）いて『我らは一切をすてて汝に従いたり』と言い出で
たれば、29イエス言い給う、『まことに汝らに告ぐ、我がため、福音のために、
或（あるい）は家、或は兄弟、あるいは姉妹、或は父、或は母、

「あるいは妻」という言葉もあるんです。

或は子、或は田畑をすつる者は、30誰にても今、今の世の時に百倍を受けぬ
はなし。

「我がため、福音のため」という。キリストが「我がため」と仰るときはもちろん、手放しの「我がため」ではないですよ。

「我を受く者は父を受くるなり」

と言っておられるので、決して自我の我なんかを言っているのではない。「神のため」とい

うのと「我がため」というのは同じなんだ、キリストの言葉は。「我」というものと「福音」というものと「神」というものが同じなんだ。神とキリストと福音は――キリストは福音体だから――これを分けることはできない。福音というのは一つの概念ではない。「よきおとずれ」というのは、キリスト自身が「おとずれ」そのものなんだ。

どうか、皆さん、行き詰まったときに、

「主さま！　キリストよ」

と、何ものよりも慕わしく呼びかけて、その中に入っていかなければ、展開しませんよ。

「他のものをみんな棄てろ」

というんだから、日本でこんな文章を読むと、

「これは危険思想だ。日本の道徳に反する」

なんて言って、キリスト教は嫌われたんだ。こういう言葉があるものだから。

申し上げているとおり、

「神・キリスト・我というこの縦の関係を全的に立てろ」

ということです。これを全的に立てるためには、横の関係がいろんなものがあるけれども、これはみんなその時は無視されて、この縦がスッと貫いていなくてはいかんと、こういうわけです。これが即ち、

「わがため、福音のために一切を棄てろ」

ということです。「棄てろ」といったって、何も「絶交」ということではない。眼中にないわけです。左顧右眄しないことです。

皆さんの人生の課題がある。使命がある。人生の課題、使命というものを――神さまが私をこのようにお造りになった――私が一番したいということ、あなた方一人びとりが本当に一番したいという、その能力をみな神さまに一遍お返しする。さっき言ったように、一番大事な対象をキリストの中に棄てる。キリストの中に棄てると、それが今度はもの凄い力として、その人を使って動きだす。そのためには、一切のものはもはや顧慮しない。そして、私心なくして、そこにおいてその人を通して神さまが栄光を現そうとなさるところの、キリストが栄光を現そうとなさるところのものが現れてくると、今まで顧みなかったと思うものが全部、本当の顧みになってくる。みんなそれを救い上げていく。

人生にはいろいろな割り切れない事態があります。どうしていいか分からない。矛盾です。どっちの道を通っても、どうも納得がいかん。

「どの道を選ぶか」

が問題ではない。そのどれかの道を選んだときに、

「その道を通って本当のものが現れていくか」

が問題なんです。

「こうとったのが悪かった、ああとったのが悪かった」

と、相対的なものをいくら研究したって始まらないんです。ある相対的なより善きこと、より悪しきことがあるでしょう。けれども、それはどこまでも相対の世界です。相対的な、

「こちらの方がベターだ、それをとったから良かった」

とか、

「こちらがちょっと取りそこなったから悪かったか」

とか、そうじゃないですよ。ヘタすると、悪い方を取ることがあるかも知れない。けれども、そこにおいて、とにかく、この角度を本当に貫いていけば、

「信ずる者には一切のことが働きて善となる」

という。これが変質変貌されていく。環境や運命がそこにおいて創造的に変えられていく、という生命が働いていくんです。少し乱暴なことを言うと、人生はたくさん偶然の要素によって支配されていますよ。けれども、その偶然の要素というものの奥に、もう一つこの角度からつかまえて、マイナスを本当のプラスにするところの錬金術みたいな、霊化術がある。その霊化術は、今キリストが言われた、

「この関係を100％にしていけ。そして本当に自分の使命に生きろ。自分の本質と使命に生きろ」

と。いいですか、そういう柔軟な弾力性をもった魂にならなければいかんですよ。

仏教の世界で、「アートマン」というのは、この世界ならびに一切の存在をその内部にあって支配すると言っている。このアートマン的なものは即ち、それは聖霊です。聖霊がキリストを通して私たちのうちに内住し、霊核が結んだならば、この霊核がちゃんと磁性をもっているから、正しい方向に向かって進む、霊的な法則をわけひらいていくことができるわけです。

そうすると、失ったと思ったものが、キリストは、

「誰にても今、今の世の時に百倍を受けぬはなし」

と言われる。「百倍」というのは、なにも「百」のことを言っているのではない。もう豊かにすべてを救う――「受ける」というのは何もこっちが儲けることでも何でもない――豊かにすべてを救い上げていく。全部、救い上げていく。失敗しているようだが、人生は本当にその人において成功している。人の目にはどんなに惨憺たるように見えようとも、その人は神の国をちゃんと立てている人です。どうか、それだけの自信ならざる自信をもって行こうではないですか。策略だとかそんな世界ではない。もう絶対に、この無的なことが本当の神的な強さなんです。

●永遠の生命体

我々の道は、天道、天の道です。どうか、現実の私たちは躓いたり転んだりの面はあっても、そんなことに決して気くずおれることなしに、自己をいつも乗り越えて行く。信仰

とは、本当の

「信仰より信仰へ」

とは、常に新たに自己を乗り越えて進んで行くことです。「プロテスタント」とは、自己にプロテストしていくんだから。これが本当の福音的ということです。人にプロテストするのではない。

そして、一切を神さまにくみする豊かな原動力となるから、原動力の動力はどこまでもキリストのもので、私するものでないから、楽なんです。もし、

「自分が何か霊的な動力をある程度もたなければならない」

なんて言ったら、それは苦しくてしょうがない。何も要らん。それなら、魂がちっともこらない。そうでないと、こりますよ。魂が妙に凝(こ)ってしまう。そんな凝った魂ではダメです。楽な、凝らない魂です。

ですから、

即ち、家・兄弟・姉妹・母・子・田畑を迫害と共に受け、また後の世にては、永遠の生命を受けぬはなし。

いや実に、永遠の生命を人にやるような人になるよと。永遠の生命を人にやる。

「お前たちは永遠の生命が欲しいと言うが、永遠の生命は人にわかち与える生命である」

と。もう私たちの間にそのようにして今、天国が、永遠の生命体がここに現じている。

あちらこちらに、行き詰まったり苦しんだり、いろんな方々が、皆さん、おありでしょう。どうか、祈りの世界でも本当にこの角度から、その人たちのために祈り、また時あったら訪ねてやる。この生命を与える祈りをもって行かなかったらダメですよ。何とかしてその喜びを共にしましょうと。それは人間的な慰めとか何とかいうことではない。それが本当にキリストが仰るこのことなんです。そのためには、100％にこの縦の線が貫いていることです。

●一切を救い上げる

そういうことで、マルコ伝10章の13節から31節は、本当に福音的な、

「本当のキリストの福音の在り方、イエス・キリストのあられた在り方というものは、自分自身を何ものともせずして、一切、神のうちに入ったならば一切ができることになり、一切を棄ててみたならば一切を救うことになった」

というのが、このキリストの御言の集約した事態です。これはキリスト自身なんだもの。一切を棄てたんだから、彼は。父も母も子もありはしない。みんなこれを棄ててしまった。マリヤに

「なぜ、来ましたか」

なんて言ってみたりね。切り捨ててみたところが、逆にこれをみんな救い上げるということになる。

何も、皆さんが、奇言や奇行をしろという意味ではないですよ。心の向きがそういう向きであるときに、本当に豊かな広大な、

「一切を担い上げ、一切を救い上げる」

というのは、大言壮語するのでも何でもない。我々のような小さな者を通して、キリストがそういった質の働きをなしてくださるということです。言葉通りに「一切」なんてことは出来やしませんよ、私たちには。けれども、そういう質が動いてくるわけです。そして、本当の隣人を救い上げるとはどういうことかということがここから出てくる。

今は、本当にやり切れない問題にぶつかっている方もあると思う。それでも、ご心配ないです。キリストの中に深く自分を入れるというと、自分を誤解したり、自分を嫌ったりするいろんなその人たちのために本当に逆に祈れるですよ。そして、いつか見てごらん。その人を通してその人たちが救われるときがくる。小さな子供や幼児は将来のことが分からない。けれども、それが本当に母の心を知るときがくる。

大事なことは、自分自身がそのようなキリストの愛、生命、光、これを本当に身に体して栄光を現していく。そうしたらば、必ず神さまはその時その時に然るべき道を示してくださる。あまり工夫はしない方がいい。

まぁ、いろんなことがおありでございましょうから。ご自分の一人びとりのいろんな具体的なことは、このイエス・キリストの事態に照らし合わせて、誰でもがこのキリストの事態に、この言葉この現実に即して対処していくときに、必ず展開し進んで行く。これが本当の無的実存ということです。